



# LA NOUVELLE

## N°10

### PRINTEMPS

東京外語協会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10  
本郷サテライト 東京外語協会  
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)  
2013.4.1 発行

## 第18回サロン仏友会開催さる

西 敏彦 (昭46)

「サロン仏友会」の第18回目の集まりが2012年11月17日、文京区・本郷の外語サテライトで開かれた。雨の中、来場の60人ほどの同窓生らはこの日の講演者、遠所尚志・NHKエグゼクティブ・プロデューサー(写真右、昭54)のユーモアを交えた優しい語り口とたっぶりの映像を堪能し、あっという間の90分間を過ごした。講演のタイトルは「ドキュメンタリー、そして音楽、“動く映像”の誕生～リュミエールとメリエス」。30数年前のNHK入局以来、『アインシュタイン・ロマン』『映像の世紀』『新シルクロード』などの番組制作を手掛けてきた遠所さん。貴重フィルム発掘の裏話やドキュメンタリー番組制作に対する米国、英国、日本の哲学の違いに関する言及も興味深かった。



講演の開始前に仏友会の立ち上げ、隆盛に中心的役割を担われた故・田島宏先生(昭19)の奥様、英子様が9月14日に亡くなられた旨の報告が藤倉洋一会長よりあり、全員で黙とうを捧げた。

遠所さんの在学中の居場所はオーケストラ部(ファゴット担当)だった、とのことで、外語・オーケストラ部卒業の後、NHKの音楽、ドキュメンタリー部門で活躍を続けている。若き日のクラシック音楽との触れ合いが後の番組づくりにも大いに役立ったようである。

米国の発明王、エジソンが目の錯覚を利用して物体が動くように見える映画の原型を作ったが、その数年後の1895年に仏国・リュミエールがスクリーンに大きく映写された映像を大勢の観客とともに見る今の商業映画の基礎を作りあげ、観客を大いに驚かせた。その当時、大容量の光線をスクリーンに向けて打ち出すレンズとして水の入ったフラスコが利用された、とのこと。世界最初の上映映画「工場の出口」は今から100年以上前の服装、工場労働者の態度などを知るうえで、貴重な史料



講演に聴き入る出席者たち

であることに間違いなさそうだ。19世紀最後の1900年にはパリ万博の様子やジベルニーの印象派画家、モネの様子なども動画として撮影されている。1898年、リュミエールのカメラが京都を訪れ、日本に関する最初の動画映像を撮影している。また、この頃起きたボーア戦争(南アフリカ戦争)では戦場の様子が史上初めて、動画として撮影された。

遠所さんは時間を見つけては世界各地の映像フィルムの収集箇所を訪ね歩いた。無造作に積み上げられた撮影済みフィルム缶の山。ほとんどのフィルムは経年劣化で最初の部分は撮影物の判別も難しいが、時折、歴史的な大発見に巡り合うこともあった、という。その一例として、第一次世界大戦のきっかけにもなったハプスブルグ帝国の皇太子夫妻(サラエボで暗殺)の棺を運ぶ葬列の貴重映像が見つかった。ガラスなど贅を尽くしたものだ。

一方で、米、英などのほかの国のメディアとの共同の番組制作の場合、それぞれの譲れない“基本哲学”がぶつかり合って途中で分解してしまうケースもあった、とのこと。遠所さんの手掛けたあるドキュメンタリー番組制作では日、米、英のメディアの共同でスタートしたものの、1年間で行き詰まったとか。日、米が動く映像に優先順位を与えたのに対して、英はきっちりした正統的な歴史ドキュメント番組としては、映像的には見栄えのしない静止画なども不可欠と主張し、折り合いがつかな

かった。

リュミエールの後に出てきた仏・メリエスはSF Xの祖ともいわれ、トリック映画を100本程制作した。その中でも傑出しているのが1902年制作の「月世界旅行」。メリエスは当時、白黒版、カラー版の2つを制作した。カラー版は今から10年ほど前に原版が見つかったが、それは白黒フィルムの上に絵具で色を塗ったもの。色彩の消えたもの、薄れたものなどが混在し、修復作業に10年かかり、ようやく最近になってデジタル修復版が見られるようになった。月を目がけてロケットで到着、冒険の後に地球に戻る、という当時としては途方もない空想のストーリーもさることながら、当時の色使い、色彩感覚なども知ることができて興味の尽きない映像となっている。現在は、パソコンの無料配信サイトでも鑑賞可能なようだ。

講演の締めくくりは『新シルクロード』で手掛けたテーマ曲の作曲に関してだ。最近の若手のテレビ番組制作者は番組の中の音楽に関して、あまりこだわらないが、遠所さんはこの番組には世界的なチェリスト、ヨーヨー・マの旋律が欠かせない、と米国の彼の音楽拠点に直接乗り込み、自分の番組の基本的な哲学、イメージを伝えて、作曲を依頼した。引き受けた彼は世界中から彼の元に集まっている演奏家たちに即興で作曲させ、それを数か月かけてまとめ、テーマ曲に仕上げた、という。NHK屈指の人気ドキュメンタリー番組だった新、旧のシルクロード、喜多郎とヨーヨー・マの比較も面白そうだ。



懇親会はボジョレ・ヌヴォと料理で

## 「外国語落語で世界を平和に」

高木淑人(さやま亭遊圓 昭49)

みなさん、外国語で落語をする人達がいることをご存じですか?



外国語での落語は英語、フランス語、韓国語、中国語、トルコ語など私が知っているだけでもこれだけあります。英語落語は、1980年代に大阪で桂枝雀と英会話学校の経営者であった山本正昭氏が創始者で、枝雀は米国やオーストラリアなどで何度も公演し、落語の笑いが外国人にも通じることを証明しました。この両名は既に亡くなりましたが、英語落語の流れは桂かい枝等数人のプロや私を含む多くの素人落語家に力強く引き継がれています。

私は一昨年パナソニックを定年退職しましたが、40歳代の頃、落語が得意であった職場の先輩から落語の指導を受け、関西弁と英語で落語を覚えて素人寄席に数回出演しました。東京出身の私の関西弁は英語より下手であったため、現在は英語落語だけ練習しています。

私は退職前の約10年間、松下幸之助記念財団で国際大学(南魚沼市)の留学生への奨学金助成等を行う仕事をしていましたので、留学生達が財団に訪れた際には、毎回宴会で英語落語を押し売りしていました。現在大阪では年に1回素人英語落語寄席が行われており、私は10年程前に出演しましたが、最近出演希望者が多く、予選があるため、出番が回ってきません。私が所属している英語落語サークルのメンバー有志は年に一回海外公演をしており、今年の2月にはハワイ公演を行いました。

大阪にはフランス語落語が得意な方もいます。「河内ワイン」

の専務をされている女性で芸名はロマネ金亭さんです。この方のブログによれば、2008年以降何度かフランスで落語の公演をされたようです。この芸名は桂文枝(旧三枝)さんが名づけたようですが、文枝さんは私の師匠(元職場先輩)と関西大学の落研時代に一緒に活動していたため、二人は懇意にしており、私も何度か文枝さんに楽屋でお会いしました。

ご参考までに、ロマネ金亭さんのパリでのフランス語落語体験が下記URLの「ロマネ金亭のブログ」でご覧いただけます。  
<http://blog.livedoor.jp/kawachiwine/archives/2012-02.html>

財団での仕事にはトルコの国立大学、チャナッカレ大学日本語学科の学生の日本語研修助成もありましたが、それで来訪した学生の一人がその後大阪大学の博士課程で落語の国際化について研究をしました。彼は日本語落語も上手く、2010年の全日本学生落語選手権で敢闘賞を獲得しました。

今後、落語の多言語化を進めるために、仏友会の皆様にはフランス語落語への挑戦と推進をお願いしたいと思います。写真は昨年国際大学で開催した英語落語寄席でのショットです。日本製の笑いの力で世界平和に貢献しましょう。



筆者(右端)と落語仲間たち

## 第18回仏友会総会のお知らせ

日時: 2013年4月20日(土) 午後2時～5時  
午後2時～総会、2時30分～講演  
3時40分～写真撮影&懇談会  
会場: 大手町サンケイプラザ 201, 202号室  
(東京メトロ大手町 E1出口)  
講師: 渡邊啓貴氏(昭和53年卒)  
東京外国語大学教授(国際関係論)



2008年4月～2010年3月、駐日日本大使館公使として派遣、広報文化関係を担当

演題: 「オランダ大統領の1年」

渡邊先生は、2年前の総会でも「文化外交よもやま話」を講演していただきました。今、国内ではリスラの嵐が吹き荒れ、外交面ではアフリカのマリに軍隊を派遣するなど問題のフランスですが、これに挑むオランダ政権について語っていただきます。

お誘いあわせの上お出かけください。

参加費: 5,000円

同時に、2013年分通信費(1,000円)も受け付けます。

申込み: 4月5日(金)迄

メルアド登録会員にはe-mailで、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。

連絡先: 藤倉洋一(昭45)

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net

## 子供は文化の使者

石井恒夫（昭40）

1976年2月、我々はウラン探査の先発隊として、サハラ砂漠の小高い岩山にテントを張った。

昼の疲れから深い眠りに落ちたはずが、何となく深夜に目が覚めて、驚嘆した。

私は、帯刀の黒装束の大男たちに囲まれていたのである。覆面の中から覗く眼光は鋭く、口々に罵声を浴びせてくる。何を言っているのかさっぱり分からない。

驚いて飛び起きた仲間も仰天している。これは呪いの夢か、いや現実だ。

私は恐怖をこらえながら、気を取りなおして話しかけてみた。

「どなたか、この中にフランス語を話す方がおりますか？」

返事はない。再度試みた。しばらくすると、大男たちの間をかいくぐって、一人の少年が顔を出した。

「あなた方は、お墓の上にテントを張った。それで皆が怒っているんだ。」

我々は、すぐさまテントをたたみ、少年を介して、ていねいに非礼を詫びた。

これが、その後幾度となく私が助けられた少年エリスとの出会いであった。

彼らの帯刀は、羊を守るためなんです。人には決して向けられません。けれど、彼らの生活文化を無視するようなことをすると、刀を抜きかねない、と賢いエリスに教えられた。

にもかかわらず、私はその後何度も、黒装束の憤怒の輪の中に孤立したものである。

時給という概念が理解されず、自分より高額を受け取った息子に腹を立て、私に詰め寄った人夫頭がいた。なんと、エリスの父親であった。一緒に来ていた末っ子のエリスが仲に入り、見事に父親を説得してくれた。父と仲良く手をつないで帰って行く後すがたに感謝した。

20名のはずの従業員が給料日に50名並んだ時には驚いたが、ワークシェアリングしているんだよ、と教えてくれたのもエリスであった。

ラクダに乗って通ってくる従業員の出勤時間がまちまちなのは、彼らの住居がたびたび移動するからですよ、とも教えてくれた。

悪夢で始まったサハラの4年間であったが、エリス少年と出会ったおかげで、遊牧民の生活文化に率直に向き合うことが出来た。異文化交流の担い手は、エリスのような少年少女であろう、と実感している。



語劇出演者らと：中央がベル役小島さん、左から2番目が監督の鈴木さん、左端が藤倉会長、右端が金澤副会長

## 外語祭～『フランス科語劇観劇記』

松本伸夫（昭38）

第90回外語祭は2012年11月21日～25日府中市朝日町の東京外語大で開催され、メインイベントの一つ、語劇のフランス語科上演は、24日午後2時半過ぎから異文化交流施設、アゴラ・グローバル内1階、プロメテウス・ホールで始まった。この日はホームカミング・デイと重なったため、午後2時から2階まで長い行列ができ、開場時には超満員となった。

上演演目は『美女と野獣』（“La Belle et la Bête”）。私のような <ロートル（老頭兄）>の頭にすぐ浮かぶのは、1945年第二次世界大戦終了直後にフランスの詩人、ジャン・コクトーが、映画俳優、ジャン・マレーを主演に制作した仏映画である。すでに名画の仲間入りしており、鑑賞した人も多いことだろう。この映画は、18世紀に書かれたフランス女性原作者のもっともポピュラーな作品に基づいており、野獣を含め三役を演じるマレーの存在感が圧倒的で、ベル（美女）をいじめる意地悪な2人の姉も頻りに登場する大人の物語。

これに対して今回の『美女と野獣』の原案は、ディズニーのアニメ映画。主役は父親思いの村娘、ベルである。そして王子とともに魔女によってティーポットやカップ、燭台、時計、タンスなどに変身させられたお城の執事やメイドたちが、色彩豊かな奇抜な衣装で登場。行方不明となった発明家の父親を捜しに城を訪れるベルの味方となって活躍するので、おとぎ話のムードが大いに盛り上がる。一方ベルの住む村は、腕自慢の狩人で男前気取りのガストン（荒井信昭君が好演）が支配。ベルにしつこく結婚を迫り、手下を従え野獣退治に城まで押しかける。

このような現実と非現実が入り混じったにぎやかな舞台で、若々しい元気を発散させ、特に見事な歌や踊りで観客を引きつけたのは、ベル役の小島万奈さん。また27人という大人数のラインダンスなど村や城での多彩なアンサンブルも、裏方の手作り衣装とともに見応えがあった。さらに総勢50人を超える舞台全体には、鈴木理紗子さんの監督としての愛のこもった目配りが冴えわたっていた。そして終幕で、女子学生の藤塚梨沙さんの演じていた野獣が、ベルの愛の言葉によって魔法を解かれて元の王子に戻った瞬間、スイス人男子留学生と早代わり。客席はあっと驚き、大きな拍手を送った。

今回も仏友会の藤倉洋一会長、金澤脩介副会長、相馬壽美乃前副会長が同公演を鑑賞。公演後、舞台の外で出演者たちに囲まれながら藤倉会長が「ブラボー！」を連発、鈴木監督に恒例の支援金を手渡した。

してみれば、再と得難いボンヌチャンスに恵まれた。非常時様々！乗組の中尉・水兵・下士官、之を三日に亘って、東京市内案内といふ訳。日比谷から市電で、麴町、九段、神田を経て上野へ。そこで精養軒で茶菓の接待よろしくあって博覧会をフリーパス。・・・この赤襟嬢（若い芸者・半玉）ならぬ詰襟氏（ボーイ）に成ったのが、僕ら四年生の中の十余名と、今年の卒業生が十余名。これに加わったVolontaireが先輩の高橋邦太郎氏。最初に接したのが候補生氏だった。強い日本の軍人さんを共に想ひ較べて感無きにしもあらず。

何と！皆、優しい、しかも実に若い、気持ちのよい顔つきばかりだ、そうして、皆、僕と顔を合はせると、その若々しい口元に微笑を浮かべてみせるのだった。気持ちの好い仏蘭西人！

Français sociable！市電の窓から街の通行人に対して、今貰ってきたばかりの赤青の風船玉を大きく振って見せる彼ら。愛すべき仏蘭西の水兵さんたち！此の三日間僕達は実によく仏蘭西語を喋った。それが何と楽しく、懐かしかったことか！僕達は嬉しかった。船を下りた僕の手には、猶も彼らの大きな

## 3・11パリからのまなざし

沼田睦子（昭44）

2012年3月11日、パリのユネスコ本部ではメモリアルコンサートが開かれ、その折、東京外語大学生・院生の企画制作による「東北復興写真展」が会場のエントランスホールで展開されました。年が明けた今、やや旧聞の感があるイベントながら、旧聞にしてはならない、という思いもあり特筆しておきます。

フランスのテレビは公営民営共に地震発生と津波襲来の衝撃の映像を、当日に次いで幾日も幾日も、これでもかこれでもか、と流し続けました。見ずに終わった人はいないでしょう。一方で、復興を語る番組はほぼ見受けられませんでした。この東北復興写真展では、フランス語の解説を添えた約百点の写真の多くが同地点の被災直後の報道写真と復興の現状写真の対で構成され、2点が対照位置に展示されました。こうして復興の進展を伝えたことは、恐怖の映像だけを心に宿した人々に安堵を与え、さらには被災者たちの復興の意思への共感と支援の思いを育む大きな役割を果たしたろうと思えます。

広い空間に短時間で効果的な展示を設置したのは、東京から来パした実行委メンバーにパリ留学中のフランス語科女子学生が加わった10名足らずでした。

当初、同窓会事務局からパリ支部に向けて、写真展実行への支援依頼があった時、被災地救援は日本人全体の行為であるのに何故特に東外大の在学生がこうした企画に乗り出したのか、ふと疑問が湧きました。企画書に明快な回答がありました。「東北復興写真展」は一過性の展示会ではない。ウェブサイトを設定、展示写真に現在東外大が教授している26言語で説明を付け、復興支援を世界に呼びかけて行く。我らが母校は被災地救援にこんな切札を持っていたのです。

コンサートと写真展の併催は相乗効果を生み、写真展だけではこれほどの来場者数は望めなかったろうし、メモリアルコンサート超満席の1300人の聴衆は、心を寄せる被災地の復興状況を知ることができました。

ユネスコ本部では既に、東日本大震災直後、フランス在住の演奏家75人が国籍混交で創設したその名もOrchestre JAPONAIDEがチャリティーコンサートを開いています。メモリアルコンサートは彼らと、佐渡裕が指揮する少年少女弦楽奏団47人のスーパーキッズに、ピアノとバイオリンのソリストが加わる共演となりました。盲目のピアニスト辻井伸行はスーパーキッズとの演目、ショパンのピアノ協奏曲の後、止まないアンコールに応じて、華麗で知られたリストのリゴレットパラフレーズをソロで弾き、聴衆を陶然と言うより呆然とさせました。

圧巻は最終曲「ボレロ」。両オーケストラ総員が舞台からこぼれんばかりに勢揃いし、聞こえるか聞こえないのかかすかな音量から、長時間をかけてあの同じ楽句をクレッシェンドさせて行き、最高音響で会場を包み込んで終わりました。まさに、復興支援が輪を広げて行くさまを象徴する、みごとな演奏でした。



靖国神社を参拝するフランス士官たち

掌の触感が判明りと残っていた。Bon voyage, Jeanne d'Arc!>・・・と、会報に刻印されているのは微笑ましいはしゃぎぶりである。

彼らは「戦死」の予感前にして、東の間の喜びにも心が弾けたのであろうか。こうした

可憐な若者たちに爆弾を抱かせ、次々と敵中へ突入させたのが、あの戦争であった。「国のため」を信じて散っていった純真な国家英雄たちの霊に、今さら誰がどう詫びることができよう。日本国民の慙愧の思いは、世代を超えて永久に消えないであろう。悲惨とも無残とも形容しがたい国家悪夢に押しつぶされた清廉な若者たちの心・我が先輩がたの熱い涙は、どこへ飛び散って行ったのであろうか。

（次号へつづく）

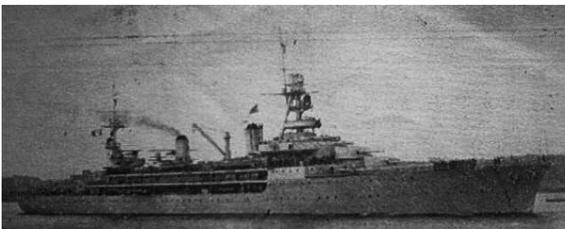


## 昔日の青春 佛友會々報

### 80年のタイムカプセルを開ける5

坂井英俊（昭40）

一 昭和8年6月刊の会報より、以下は当時4年生・篠田俊蔵氏の『仏蘭西練習艦案内記』から、その要約抜粋である。一 <仏蘭西から最初の練習艦ジャンヌ・ダルクがわが横浜にその雄姿を現したのが四月の三日、秋（とき）正に国際非常時である。兎に角、熱烈なる歓迎振りである。お蔭様で僕達に



訪日した巡洋艦ジャンヌ・ダルク